

地域会議の開催状況等について

凡例【主な開催内容】

：事業説明等、 ：支援金や木育事業の選定、 ：実施状況報告、 ：現地調査

区分	委員数	既 報 告 分	今回報告分	次 回 報 告
県民会議	10名	第1回県民会議 (6月12日)	第2回県民会議 (10月27日)	第3回県民会議 (3月11日)
佐久 地域会議	8名	第1回 6月10日開催 、	第2回 11月16日開催 、	第3回 2月22日開催 、
上小 地域会議	8名	第1回 6月24日開催 、	第2回 11月14日開催 、	第3回 3月17日開催 、
諏訪 地域会議	7名	第1回 6月19日開催 、	第2回 11月6日開催 、	第3回 3月16日開催 、
上伊那 地域会議	9名	第1回 6月26日開催 、	第2回 10月7日開催 、	第3回 2月9日開催 、
南信州 地域会議	10名	第1回 6月15日開催 、	第2回 12月1日開催 、	第3回 3月5日開催 、
木曾 地域会議	9名	第1回 6月8日開催 、	第2回 11月19日開催 、	第3回 3月8日開催 、
松本 地域会議	8名	第1回 6月29日開催 、	第2回 11月5日開催 、	第3回 3月2日開催 、
大北 地域会議	11名	第1回 6月2日開催 、	第2回 10月6日開催 、	第3回 3月19日開催 、
長野 地域会議	7名		第1回 10月13日開催 、	第2回 3月9日予定 、
北信 地域会議	8名	第1回 7月14日開催 、	第2回 1月15日開催 、	第3回 3月15日開催 、
計	85名	9会議分	10会議分	10会議分

地域会議開催状況

(注)・各会議の委員は、五十音順・敬称略で記載。 は座長、 は座長代理。
・主な意見については発言順で、質疑関係は除いて記載した。

平成 21 年 11 月 16 日(月) 第 2 回 佐久地域会議

(佐久地方事務所)

【会議事項】

1 現地調査

【出席委員：5名】

井出 興正	佐久林業経営者協会 副会長
麻生 知子	NPO 法人信州そまびとクラブ
田中弓美子	南佐久消費者の会 副会長
古越 修	佐久森林組合 参事
山下 昌秀	臼田高等学校環境緑地化教諭

【質疑応答】

1 佐久穂町大日向 緩衝帯整備

緩衝帯の施業方法をもう少し詳しく聞きたい。

野生動物の隠れ場所をなくすため、奥行き15～30mの間でかん木や下敷を刈払っている。切った藪は柵にしたりはせず、そのままにしている。イノシシについては、緩衝帯整備後出没がなく効果を実感しているが、ニホンジカについては、8月過ぎから被害が発生しており、捕獲(個体数調整等)、防除(侵入防止柵等)、環境整備(緩衝帯等)の対策を組み合わせ、効果を上げていきたい。

山全体を刈払ったほうがより効果が高いのか。

広い面積で実施したほうが効果が高いと思われるが、なるべく多くの面積を整備したいので、15m～30m幅としている。

作業は、秋から冬にかけて実施し、地元の方にも一緒に作業をしていただいた。

緩衝帯整備の際の選木方法は、

基本的には10cm以下のかん木を全て伐採している。

藪は切ってもまた生えてくるので、数年後にまた藪刈りが必要になるのでは。

補助事業は最初だけ、緩衝帯整備を機に地元の方の目が山に向いて欲しいという願いもあり、今後は自力で藪刈りを続けてもらいたい旨を伝えている。

シカ対策に犬を使う予定はあるか。

本年12月から、シカ追払いのための“里守り犬”の育成訓練を始める。

全国的にも初めての取り組みであり、まず、町職員が3頭の訓練に参加する。

シカ肉の利用は、

シカ肉は利用率が2割以下と低く、残りは残渣となるため、処分施設が必要となる。立地、採算、衛生管理等課題も多く、十分検討する必要がある、町単独では難しい。



2 佐久市沓沢 高能率間伐搬出システム研修団地

作業道開設の費用は、排水処理はどうしているのか。

開設経費は2,000円/m程度。15~20mに1箇所程度横断工を設け、分散排水する。

現地の地形に合わせ、現場発生材を利用して施設を作っていくのが基本。

このシステムは何人で作業を行うのか。1日当たりの生産性は。

最低2名（ハーベスタとフォワーダのオペレータ）最大で、ハーベスタが70m³/日、フォワーダが40~50m³/日の能力があるが、搬送や木寄せ距離等の条件もあり、30m³/日位ではないか。

ハーベスタ付属のウインチの木寄せ距離は。約50m。

この作業道の今後の利用予定は。

森林所有者の要望で、軽トラックが通れる規格になっており、間伐終了後は山見などに利用される予定。次の森林整備にも利用される。



平成 21 年 11 月 14 日 (土) 第 2 回 上小地域会議

(上小地方事務所)

【会議事項】

- 1 平成 21 年度事業実施状況
- 2 意見交換
- 3 現地調査

【出席委員：5名】

齋藤 篤	上小木材青壮年団体連合会 会長
佐藤 文雄	上田商工会議所 事務局長
竹内 邦義	長和町役場 産業振興課長
別府 基規	上小地区生産森林組合連絡協議会 会長
松沢 康博	信州上小森林組合 企画幹

【主な意見】

(税の使い道がわかりにくい点につて)

市の広報とかは、かなりの人に見られていると思うが、PRはお金をかければ、人が集まるという部分がある。お金をかけない部分でももう少しなんとかというなら、我々としてもお手伝いするところはお手伝いして、商工会も活用していただければ。

木材等利用する側の立場として間伐材の有効活用の面からいえば、アカマツはなかなか利用できない。松本辺りでは梁材に使ったりしているがそれほどの多くの量にはならない。利用する側としてもそのあたり考えてゆかなければならないが。

薪ストーブとかも非常に性能が良くなり、昔のようにススの問題とかも改善されているがなにせ薪だけでは。

木青連としては県と一緒に木製のベンチづくりとかを杉材を使っておこなっている。できたものについては上田市へ寄付をしている。

学校教育においてもそれから森林教室とか3、4校回って推進してゆきたい。



【会議事項】

- 1 平成 21 年度事業実施状況
- 2 意見交換
- 3 現地調査

【出席委員：6 名】

- | | |
|-------|----------------------|
| 大井 明弘 | NPO 法人エコラ倶楽部理事長 |
| 小平 榮三 | 諏訪森林組合 理事 |
| 小林 利行 | 県生産森組等団体有林連絡協議会諏訪支部長 |
| 野口 行敏 | 県経営者協会諏訪支部長代行 |
| 細川 忠國 | 諏訪木材協同組合 理事長 |
| 山田 勝文 | 諏訪市長 |

【主な意見】

政権が交代して、マニフェストに書いてある内容がどの程度進むのか。間伐はすべて材を出すべきという話もあるが、どこでも出せる訳ではなく、切り捨て間伐も必要である。信州カラマツなどの合板工場での利用等、いい方向に向かっていると思う。

子どもに間伐材を見せて森林の大切さをアピールすることで、ペレットの値段を上回るメリットを見出すことが大切。

昨年までは材を買ってくれたが、今年は買い手がない。森林整備のイベントを催して、40～50 名の参加者に間伐材をおみやげにさしあげたら喜んでいただいた。

家庭用の小型ペレットボイラーを普及していきたいと思っている。

県は公共施設の燃料の何%までは木材燃料を使用するというようなことを示すべき。目的を持って進める姿勢を見せるべき。

薪のほしい人が森林整備を行う仕組みができればよいと思う。



【現地調査】 岡谷市花岡地区

【会議事項】

- 1 現地調査
- 2 平成 21 年度事業実施状況
- 3 意見交換
- 4 最近の情勢等

【出席委員：9 名】

植木 達人	信州大学農学部 教授
唐木 一直	南箕輪村長
竹松 杉人	南福地森林整備委員会 委員長
平澤 照雄	平澤林産(有) 代表取締役
松岡みどり	K O A 森林塾
宮崎美和子	県女性農業委員の会上伊那支部
宮島 洋子	伊那商工会議所 創業塾卒業生
森 敏彦	上伊那森林組合 参事
山浦 速夫	県経営者協会上伊那支部

【主な意見】

地域で進める里山集約化事業の要望が多いので予算の確保をしてもらいたい。

搬出間伐を森林づくり県民税の対象にしてもらいたい。搬出したことにより森林内が整理され、間伐の成果が分かり易いため地域へのPR にもつながる。

間伐率については、一律に30%でなく現地の状況に合わせて実施することが大切である。

事業実施主体が森林施業の方法等を提案するプランナーとなる必要がある。

間伐のイメージを一般住民に分かりやすく伝えるため、モデル林を多く作りPRすることが必要である。

林業の担い手の育成をどうするのか、誰が担い手なのか見えてこない所がある。

森林整備事業については、今後増加が見込まれるので担い手を計画的に確保していく必要がある。

一般住民への間伐のPR は目に見えることが大切。森林整備のゴールが見えづらいので見える工夫を。

県民税が里山整備のきっかけになった。材を搬出して地域で木造住宅等に活用することが必要である。

森林所有者だけでは、森林施業の判断についてのノウハウがなく、手入れができない場合がある。

開設した作業道は、間伐材搬出後も森林の管理や整備に有効に活用していく。

林業と農業は接点があるので、担い手対策等人材の育成に活かせるのでは。

木育事業をきっかけに子供たちが森林や木材等に興味を持ってもらうためには、息の長い活動が必要である。

間伐材搬出、担い手対策、事業者対策等先を見据えた事業展開が必要である。

第3 回の地域会議には、2 年間の委員活動の成果として委員の意見を纏めた提言書等を作成したい。



【会議事項】

- 1 現地調査
- 2 意見交換

【出席委員：8名】

遠藤 寛子	飯伊森林組合総務課指導企画担当
大蔵 実	伊那谷の森で家を作る会代表
沢柳 俊之	地域ぐるみ環境 I S O 研究会事務局
寺岡 義治	森林環境インストラクター講師
平栗 雅代	飯田エフエム放送(株)パーソナリティー
村澤 崇	林業家
矢澤由美子	県地球温暖化防止活動推進員
山田 庄治	下伊那郡町村会事務局長

【主な意見】

木育推進事業 (ベンチ作成)

父兄や卒業生たちが育ててきた学有林の材を、形に残して、利用した事は素晴らしいと思う。学有林材の利用は、次の世代に伝えるような事業にしてほしい。又、形として伝えて行くことが良いのではないか。松川町の住宅建築現場で、施主と事業主の業者が、施主の考えているような家づくりができればと同じで、生徒達の木への思いが、形に残せる事が大事ではないかと思った。住宅建築は、施主も住宅づくりに参加して、自分の山で育てた木を、自分の暮らしの中に残していくと同じ考え方で、遠山中学校の木育事業も感動させられた。

遠山中学校の木育事業は、将来の生徒達の思い出になる事業だと思った。

各学校へ出向いて、林業体験をする中で、ヘルメット等が欲しいと言った話題がよくある。飯田市ではヘルメットは手一杯の上、あまり利用頻度が多くなく、使用期限・安全保証期間があるので、他の大きな団体で、ヘルメットを確保して、貸し出せるようなシステムであれば、安全にも配慮した物で使えるのではないかなと思い、森林税等でもこの取組みができないか考えた。

木育推進事業は、地域に対しての P R、発信がわかりやすい形で行える事業かと、遠山中学校の例を見て感じた。又、起承転結がはっきりしている事業かとも思った。学有林を育てて 50 年経った今、学有林からの材の利用方法を、学校だけではなく地域全体で考えて、地域と連携していく事ができれば良い方法も考えられるのではないかと思う。



この地域は、遠山杉の地域材を使った公共建築物が多い場所だと見てきた。それは、地域材を搬出できて、材を加工できる製材工場があるというのが、大きな強みだと思う。学有林材も、それらの施設を通じて利用されたのかなと、又、学校の施設の改修に材が利用できれば一番良いのではと思った。委員からの提案通り、学校の中だけで考えるのではなく、地域の人達、それから我々も支えながら、利活用できる方法を提案する事が必要と考えた。

森林づくり推進支援金事業（竹林整備事業）

整備をした後は、地主が面倒を見るという事だが、若者がいない所では整備が続かないのではと感じた。又、竹林整備は、後まで相当手を入れる事が必要で、個人では出来ないと感じた。

その他全般

今日見て来た現場で、「森林づくり県民税を活用しています」と表示があったのは、喬木村だけであった。遠山中学校の学有林の材を看板に使ったらと感じた。

上村の間伐材が切り捨てであり、利用できないのが残念。山のサイクルは単純なのに、事業を実行するまでには、同意書を得る等大変な事だと感じた。伐採された木が、100%近く利用できる体制づくりが大切だと思った。木育推進事業を行う学校が、山が身近にある学校ばかりで、もう少し町場の学校もこの事業を考えてほしいと思った。

上村の間伐現場では、アカマツが伐倒されていなかったが、将来は松くい虫の侵入も考えられるので、伐倒は大変と感じた。間伐材は薪にも利用できるし、特にアカマツは非常にすばらしい薪ストーブの燃料にもなる。遠山中学校の学有林は、学舎一体となって、森林整備を進めて行く形があるのではと感じた。

竹林の問題は、竹をいかに弱らせるかが、これからの研究課題だと思う。現在竹の利用が全然ない状況で、竹をどの様に利用していくか、又、竹林整備をいかにやっていくのか、国を上げての社会的な問題になってくるのではと思う。

上村の間伐は、丁寧な事業を行った事によりモデル的な現場となり、他にも波及したとの事で、美しい景観ができてきた。又、上郷の通学路も、竹林整備により明るく気持ち良くなったが、事業を取り入れるには、大変な苦労があった事を改めて知った。森林税を導入して、里山が整備されて、それが地域の住民に実感してもらう事は、昨年度より今年度、また次年度という感じで、小さい一歩だが、大切な広がりを見せ始めていると感じた。又、子供達が、通学路が「きれいになったよ。」と父兄に話す事で、事業が広まるという事を今後大いに期待したい。地域住民が関心を持って、継続していく事業になればと強く感じた。

啓発事業として、木育推進事業は、効果があると思う。遠山中学校には、すばらしい木工教室があるので、教室を借りて、木工体験教室を開催、木を使う事で大きな啓発事業になるのではないかと。遠山中学校も、50年前から木を植え育てて、その間生徒が色々な体験を積み重ねて、木を利用する現在の木育推進事業の土台を築き上げられたと思う。

山の整備を行う、又、人材を育成するには費用が掛るが、税金を投入するだけではなく、森林を整備したら木材を搬出し、そして人の循環を考えて行く事が大事と感じた。今、企業では、環境問題として、地球温暖化防止・生物多様性の保存を訴えているが、なぜ企業が今、生物多様性の保存なのか疑問。遠山中学校に企業として何が出来るか、考えていきたいと思う。

里山を整備する事は、経費が非常に多く掛り、又、整備の難しさを理解して応援してほしい。木育推進事業を学有林で行っていかうといった学校があるようだが、学有林の材が大きすぎて、生徒達では作業ができないといった共通の悩みが各学校ある様だ。学校同士の交流の中から、皆で相談して、情報提供したりして、PTA・業界を巻き込んで、学有林の運営方法を考えたいと思う。

竹林整備は、今まで事業費が非常に高くなっており、なぜと疑問を抱いていたが、今日の上郷の竹林整備の現場を見せてもらい、話を聞いて納得をした。

今日出た意見を参考に、残りの事業を進めてもらいたいと思う。森林税を使って行う事業は、将来に何かを残すのだという意識が必要だと思う。3月に3回目の地域会議が予定されており、その時に答えが出せればと思う。

平成 21 年 11 月 19 日(木) **第 2 回 木曽地域会議** (木曽地方事務所)

【会議事項】

- 1 現地調査
- 2 平成 21 年度事業実施状況
- 3 意見交換

【出席委員：7名】

浦沢 英一	木曽郡森林組合長会長 (木曽森林組合長)
大橋けい子	上松町特産品開発センター利用組合 組合長
黒田仁左衛門	木曽団体有林連絡協議会 会長
柴原 秀満	木曽木材工業協同組合 理事長
羽根 正熹	大桑村殿地区郷土の森整備組合 組合長
深澤 衿子	木曽すんき研究会 副会長
松越 勝人	元王滝村産業課長

【主な意見】

本日のバスツアーは大勢の参加者があり、森林税のことを知っていたくためのイベントとしては大変良かったのではないかと。去年も委員から意見があったが所有者の意向も有るかと思うが、もう少し間伐率を高めたほうがよいと思う所が何箇所もあった。それと税活用事業をPRする看板が小さくて目につきにくいので工夫されたい。

さらにもう一点の願いは木曽福島スキー場に来られたお客さんから

の意見で、「写真を撮るとき背景の山が荒れていて様にならないので、もう少しきれいな山にして欲しい。」という話を聞いたことから、我々地元の間人も周辺の森林整備のとりまとめをやる事はやぶさかではないので事業展開をお願いしたい。



王滝の間伐について、ヒノキはもう少し伐ってもいいのではと思った。広葉樹の間伐については、針葉樹に比べて伐倒が難しいがこれからの時代は広葉樹の間伐も考えていかなければならないし、併せて安全面もよく考えていかなければならないと思う。もう一つは、人間と野生動物との共存について、かつては、動物が見通せるくらい手入れされていた山も今はクマどころか人間も立ち入れない茂みになっており、これでは、里に獣が下りて行ってしまうので里山整備が重要となってくる。今後は、里山にも実のなる木、花の咲く木や建築用材などを残していく施業が有意義であると思う。熊剥ぎ対策については、全木テープを巻くのではなく、間伐で間引くことを考慮し、10mで一本の割合ぐらいで巻いて残りの木は遊び木としてクマに提供していくようなことを今後研究していただきたい。

本日見学した現場は広葉樹の間伐したところがあったが、実施した木曾森林組合の皆様も大変だったろうと感じた。現場は非常に見通しが良くなり、今年はサル、イノシシなどの出没が若干少なくなったと思う。（御岳山の）信者さんが来られる神社の横や県道沿いを整備していただいたことで景観的に非常によくなり、村への来客にもよい印象が与えられると思う。今年も引き続き里山整備を行っているが、所有者に了承をいただくのが難しいという話を聞いたので出来る限りスムーズにいくような方策を考えていく必要性を感じた。

王滝でもクマの被害が出てきているので今日の大桑村の現場は非常に参考になった。王滝村でも来年に向けて役場とも相談し検討したい。

自分達の身近な里山整備の大切さを見学させていただく度に感じている。大桑では、地域の皆さんの努力を強く感じた。うちの村も地域の皆さんのやる気から始まった。やる気のあるところへ県民税のご活用いただければいいのではないかと。本日、初めてクマ剥ぎ防止のテープ巻きを体験した。以前国有林で体験させてもらった時、巻いたのは紐だったが、熊剥ぎ防止資材もいろいろなものがあるので試してみたい。また、今後皆さんが活用していく中で製造者も安く良いものを開発するのではないかと期待を持った。今日、見学、体験させていただき良かったと思う。

今日見せていただいて里山整備がしっかり出来、非常に綺麗になっていて感心した。この5年間に里山整備をしっかりやっていただきたいと思う。

今日は王滝、大桑を見せていただいたが森林税の利用でそれなりに事業が進んでいる事を実感した上松の参加者（林業関係者）でも神田地区で県民税活用事業が行われたことを知らない人がいたので、一般の人にたとえ小額でも沢山集まってこれだけ有効利用出来ているということを知るような形にしていただきたい。

税活用事業実施を他地域の方たちに知られていないという声があったが、各町村と県（林務部）の方たちには地域の皆さんに理解いただくようパンフレット作成も良いが、郡内だったら9チャンネル（CATV）で情報提供していただければ「うちの山はボサ山でどうしようもないが、こういうものを使ってもらえるとありがたいな」と思っている人は必ずいると思う。こうして里山が整備されているという事は観光面においてもすごくプラスになる事なので、是非次年度に向けて皆さんに手をあげていただけるように頑張りたい。

【会議事項】

- 1 現地調査
- 2 平成 21 年度事業実施状況
- 3 意見交換

【出席委員：7 名】

大月 公男	安曇野市商工会事務局長
大月 國晴	松本林業士会会長
菅原 聰	信州大学名誉教授
滝沢 和子	松本市消費者団体連絡協議会長
西村いそ子	松本フォレストレディクラブ会長
若林 茂孝	森林所有者
増田 富重	松本広域森林組合参事

【主な意見】

「みんなで支える里山整備事業」の進捗率が低い。今年度は去年の倍の面積を実施する計画だが、目標を達成することはちょっと無理ではないか。

集約化は、地元の人にやってもらうことが一番よいという話が現地であった。地域でまとめる人がいる所はうまくいくが、全部のところであまりよくとはかぎらないのではないか。

森林の集約化を進める上で、一番大切な役割を果たすのが区長さんではないかと思う。

集約化を進めるためには、地域の中で山林に興味を持っている人を見つけて、その人をお願いしていくことで、進んでいくのではないかと思う。

役場の方が、森林整備について地域の森林所有者に上手に説明して、整備の承諾を取れるようにしていただくことも肝心だと思う。

集約化が進めば間伐も進むと思う。これをしっかりやってほしいと思う。

施業プランナーは市町村ごとに居てほしいと思う。

施業プランナーは、森林面積がたいへん広いので、現実には足りない状況だと思う。施業プランナーとなった人が、他の人を教育していくような形をとりたいのだが、人の教育なので、時間が掛る。

森林づくり推進支援金は、市町村が自ら実施する事業で非常に重要であり、市町村が森林税について認識を持ってもらうのに必要な事業。内容をみると松枯れ対策（松くい虫防除対策）が多い。



松枯れ対策（松くい虫防除対策）について、市町村などが、森林づくり推進支援金などを活用してしっかり取り組んでいただけたらよいと思う。

間伐した森林に、間伐材が倒れていて非常に残念だと感じた。材を運び出す経費等の課題があるが、間伐材の活用方法について何らかの方法を見出すことができないかと思う。

視察した森林を見て、間伐した後は、今後、下草を刈る程度で、善光寺街道沿いに見通しがよいきれいな森林が維持できると思った。

視察した立派なあずま屋は、地域の人たちが、自分たちで間伐材を調達して自ら制作したとのことなので、このような取組を、県下の他の地域にも広められたらいいのではないかと思う。

県民の中には、森林税を払っていることの見返りがあれば、もっと税金を払ってもよいと考える方も出てくるのではないかと思う。その見返りというものは、きのこができるとか、間伐材を使えるとか、いろいろ考えられると思う。

視察したモデル団地の様に、地元で中心となってやっていただける方がいれば、大きなまとまりができて、事業も進むということがはっきりした。

地元の森林所有者の方々には、森林税を払っているのだから、所有する森林が整備されるなど、自分のところに何か見返りが還ってくることを考えた方がよいと、いつも話している。

森林税の補助事業は間伐が中心。植林した木以外の雑木についても、間伐とともに十分な手入れができるようにしていただきたい。

間伐した森林を視察して、山の仕事って、こんなに楽しめるものがあるのだなあと強く感じた。また、間伐材の利用について、ベンチや椅子など、工夫して商品化できればよいと思った。

現地を視察して、歩道脇の下草刈りなどを1回だけやってお終りではなく、長い期間、継続していくために、地域の人たちが知恵を絞って、楽しみながらやっていく仕組みができれば、一番いいかなと思った。そのお手本が今回の視察現場にあるのかなと思う。

森林税については、木を伐採した後、搬出することに一番コストが掛るので、「出し」のところにも支援があれば、ちょっとは違うのかなと思った。

委員の皆さんのお話について、一つは、間伐材の利用について、どうやって活用していくか、これについて考えていかなければならない。二つ目は、森林を木材生産としてだけでなく、いろんな面に利用していくという方向。山菜を作る場所として活用することもできるし、森林税を払ったから何かお返しがほしいということであれば、森林に出かけてたくさん楽しんで来れば十分戻ってくる。森林を多様に活用するということ。

森林税は、人工林の間伐だけではだめではないか。森林づくりの幅をもう少し広くすることと、山づくりは一生懸命やるが、そのあとの木材の利用の部分が少し薄いということが目立ってきている。これらを反省材料として、次の段階に繋げてほしいと思う。

県の来年度予算について、地域会議での意見を反映してほしいと思う。

【会議事項】

- 1 現地調査
- 2 平成 21 年度事業実施状況
- 3 意見交換

【出席委員：10 名】

浅見 昌敏	大北木材協同組合理事長
荒山 雅行	荒山林業
香山 由人	大北地方林業研究グループ会長
川上 起源	大北地区林業経営者協会副会長
郷津喜久代	梅池高原観光協会会長
菅沢 広人	長畑森林整備協議会会長
傳刀 明	大町温泉郷観光協会事務局長
平林きわ子	大町市商工会議所婦人部会長
嶺村 和徳	大北森林組合代表理事組合長
山内香代子	遊企画代表

【主な意見】

各地で森林税を活用し主に間伐を実施していると思う。間伐は将来の山づくりに主目的を置いて整備することが重要であるので、事業の消化(面積、金額)に主点を置くのではなく、“地域の林業”“地域の山”を将来的にどう整備していくのかに主点を置いていくことが重要だと思う。

現場で、チップにするための木が山積されていたが、チップ以外の利用方法が何かないのか。地域住民等へ情報提供し、薪や材として有効活用できる仕組みを作れないか。

木材産業につながる森林整備を進めていくことが重要である。大北地区は広葉樹が多いので、搬出条件や高木性の有用広葉樹を残すとか、特殊な材であるキハダを残すとか、ゾーニングをして行くことが重要。そのような細かい積み重ねが将来の木材産業につながると思うので考えてほしい。これは森林税以前の問題で、針葉樹が植栽されている場所であったり、広葉樹の山であったり、既にゾーニング的なことはされていると思う。それが現在のニーズに沿った形で機能しているかは別ですが、まず森林整備をする団地が決まれば、過去のデータを見て

どういう森林づくりを進めていくかを検討する。ただ 30%伐りますとか、野生鳥獣対策のために緩衝帯整備をやりますだけではなく、過去のデータを見て、将来的にどんな森林にしていくかを所有者の方に提案していくことが重要なので、頑張りたいと思う。



【会議事項】

- 1 現地調査
- 2 平成 21 年度事業実施状況
- 3 意見交換

【出席委員：6 名】

神戸 直日 長野地方林業研究グループ連絡会議顧問
高橋 克典 社団法人長野法人会 事務局長
十十木謙一郎 長野森林組合 専務理事
中島佐代子 NPO 法人信州フォレストワーク 理事長
中村 靖 信州信町 町長
山口 智子 生活協同組合グループ長野総合企画室長

【主な意見】

子どもたちの遠足を活用して学校林に行き、手入れをする時に、わたしたちはボランティアのスタッフとして、平日に人数を調整して、子どもたちの指導をしている。

また、毎月行っている学校、年に数回行っている学校、長野市の高原学校だけではなく学校さんの希望によって指導等を行っている。ボランティアに行くと、12 年経過したが、大人の方たちに対しての活動よりも、子どもたちでは、学校単位、クラス単位、それから地域の育成会単位で活動できるので、すごくいい活動であると私自身思っている。せっかく持っている学校林を利用できたらいいと思う。この村の公民館の主催で実施している月 1 回の会合に私達が関わっている。公有林等に色々なことができるように働きかけをしているのだが、なかなか活用されていないのが現実。間伐や森林整備することは大事なのもっとこれからも子どもたちに利用させてあげるといった考え方がもっともっと広まって欲しいなと思っている。

森林などに興味があり、関心がある人にとってみると、働きかけをすれば繋がる部分がある。興味がない人は、森林税のことなら知っているけども、その中身の活用方法まではわからないという、アンケート結果があった。

そんな状況で、こちらの小川村の森林の里親にさそっていただいて、今年で 3 年目を迎えており、多くの人に定期的にタイムリーな情報を案内として出している。

最近、森林等が身近になってきたので、いろいろな意見を含めて当方から、情報等を出していることで、森林だとか間伐だとかいったことに興味をもたれている大人の方々が増えていることを感じている。都合があえば、やってみたいなとか、行ってみたいなとか、そんな話を良く聞く。

私たちは、この周辺の里山を拠点にしているいろいろなことをしているが、この周辺を見ていただくとお判りのように、集落の周辺から全てを含めて里山だと思っている。

住民の方たちは兼業で林家であり農家でもある。最初に山を放棄され、家のまわりの畑や田んぼをやっていて、それももうぎりぎり、減らして減らしてという状況の中で、山だけを整備してあげますよと言っても、皆さん、なかなか振り向いてくれない。

それよりも、アルプスの中に田んぼが見える風景で今までだったら、写真やポスターに使われていた個所が休耕田等でなくなつては困るなということから、わたしたちは田んぼも畑もやらせていただくようになった。そうすると、住民の方々との顔を合わす機会が多くなりコミュニケーションが図れたことから、5年間山の整備をやらせていただいた。その間に私たちへの信頼度等が高まり、次の5年間も継続して山の整備を行い、新たに山の整備を任せる方も出てきた。なかなか整備のすすまない地区では、生活自体がいろんな意味で支えること自体大変になってきているところが多いので、里山全体をいかにしたら維持・保全できるのか、問いかけをしていかなければいけないと思っている。

それで、里山体験入門講座等を企画させていただき、コープさんの参加をいただきこの連休に田んぼの稲刈りを行った。今後は脱穀や収穫祭を行う。引続き参加される方を募っている。また、11月の初めにはいよいよ森林整備を予定しているので、その辺から徐々に何とかしていきたいと思っている。実際に作業をしなくても、こういう場所がありますよと見に来ていただくだけでも、良いと思っている。

SBCさんは、中条村住良木地区(ろくちゃんの森の個所)の森を上手に活用しながら、放送の中に入れていて。あのような形で取り組めると、一般の視聴者の皆さんの興味を引くもので、うまくかみあわせいくと良いと思う。

今日、委員の皆さんは、森林への知識等をお持ちだが、一般の人たちはその知識を持っていない人のほうが多いのではないかなと思う。なぜ森林整備をやらなければいけないのかが、まだまだ浸透していない。逆に、一般向けをするのであれば、先ほど見学した、間伐材を活用してりっぱなイスができるという切り口から入っていかないと、一般の人にどうだ、どうだと言ってもあまり興味を持たないのではないかと感じた。

西条財産区のところですね、パートナーシップ事業で間伐等の作業を実施した。

いろんな人が来所して、チェーンソーで間伐を行う時には、最初は本当に危なっかしかったが、地方事務所に来ていただき、きちんと教えていただいたことにより、一人で作業させても大丈夫な状況となっている。

子どもにナイフを持たせて、料理をさせるのと同じように、危ないことは危ないものだとすることを承知の上で、教育していかないと前に進んでいかないと思う。

私たちの世代は、小さい時から山へ行き自然と親しんできたが、そういうきっかけがだんだんなくなってきているので、今までのお話のあったように森林への導入、関わりが今後とも大事だと思う。

【会議事項】

- 1 平成 21 年度事業実施状況
- 2 平成 22 年度事業の動向
- 3 意見交換

【出席委員：7 名】

川久保あけみ	みどりの少年団北信地区協議会長
桑原 重雄	栄村森林組合長
笹岡 洋一	指導林家
高森 壽實夫	北信州森林組合副組合長
竹節 義孝	山ノ内町長
竹節 高四郎	自然公園指導員
山崎 義雄	瑞穂地区有害対策協議会長

<市町村、森林組合の担当者もオブザーバー出席>

【主な意見】

間伐の推進については、県民税を森林組合としても有効に使わせてもらいたいと思っている。22 年度は国の施策も変わってくるようなので、県民税活用事業を積極的に活用させてもらえば事業も円滑に進むと思われる。

里山整備を行うことで獣害対策として緩衝帯の効果がある。緩衝帯をしっかり整備することは動物との住わけにとって必要なことである。

「森林経営」という言葉は昨今聞かれなくなった。山に対する気持ちが疎遠になっている。このような状況下で活用事業を導入し、森林整備が進み材の有効活用を図ることが出来れば、山村地域の活性化に繋がり、利用可能となっている木材資源の活用からも弾みになると思われる。森林整備ばかりではなく材が活用できるような事業体系になるよう今後期待する。

切り捨て間伐が多い。里山は、戦後、資産としての価値を期待し、木を大事に育ててきた。現在はほとんど切り捨て間伐である。林業を取り巻く情勢の中で仕方がないことと思うが、間伐材利用にも予算確保をお願いしたい。また、将来的な森林づくりを見据えた施策の展開をお願いしたい。

木島平村南部小学校は本年度を持って閉校する。これに伴い学校林で間伐を実施し、その間伐材を利用してオルゴールの箱を作りその中に校歌を入れたオルゴールを入れ思い出の品として作成している。学校林は、学校を建てる時、増改築時に材が使えるように学校林を造成し、地域の人がみんなで大切にしてきた。しかし今の子供たちにはこのような意識がないため、それをとおして森林学習することができた。みどりの少年団を中心に間伐をするところから、材の搬出までの作業手順も森林学習として体験できた。また、間伐材から一枚の板を取り、地域の方々にも参加いただき記念の句や絵を描いていただき閉校式には展示できるよう作業を進めている。



県民税を活用して方々で森林整備が見られるようになってきた。しかし、現地に行くとなんどの事業で実施したかわからない。施工地にA3版程度の看板等を設置し、県民から見て税の活用の方法が目に見えるようなPRをする工夫が必要である。

県民税の使われ方が、一般県民に対し周知徹底がいまいちできていない。PR活動がされなくてはならない。間伐材をし、森林を造ると同時に間伐材の有効活用も検討し方向性を出す必要がある。

間伐材の活用が今後一番のポイントとなる。活用できる材は現在も活用している。しかし、活用できない材が山に放置されている。活用されていない材を今後どのように使っていくか検討し方向付け願いたい。特に当地域ではカシノナガキクイムシの枯損木被害が出ている。被害対策に取り組んでいただいているが被害材の活用についても検討願いたい。

木材化価格が低迷しており平成21年最低となった。国では将来的に木材自給率を50%に上げるということであるが、森林所有者の立場で考えると、伐採した時、植栽意欲が湧くように林業が再生可能となるよう森林税の活用を含め検討願いたい。

学校教育の中で、森林学習を学習の中に位置づけて、問題意識や未来を持てる子どもたちへの意識付けを地域とともに進めていくことが大切である。

間伐材の搬出に県民税を活用できるように検討願いたい。

(以上、平成21年10月から平成22年1月に開催された10地域会議・10回分)